

寺川眞知夫著

『日本国現報善悪靈異記の研究』

本学大学院修士課程修了生である著者のこれまでの研究の中から、『日本靈異記』に関するものについてまとめられた論文集であり、神戸大学に出された学位請求論文でもある。

本書には、九頁の詳細な目次があり本書の内容を一覧できるのでまずそれを示す。形式は紙幅の関係で変えている。

序章 『靈異記』研究の視点

第一節 『靈異記』研究の視点／一 『靈異記』説話と文学性の問題／二景戒の文学意識／三仏教と文学についての一つの見解／四 『靈異記』研究の視点

第一章 『靈異記』概観

第一節 上代説話の流れと『靈異記』の説話／一上代説話の範囲／二歴史書の説話／三風土記の説話／四杜寺縁起／五家伝と僧伝／六『靈異記』の説話世界「一固有伝承とかかわる説話 2 外来説話を受容した説話 3 特定の典拠をもたない説話 4 『靈異記』についてのまとめ」 * 第二節 序文・文体・説話配列から

みた『靈異記』／一はじめに／二景戒の意図した『靈異記』／三文学的表現への留意／四説話配列と『靈異記』／五おわりに * 第三節 神話・説話・物語―『靈異記』と『伊勢物語』の人の食われる話／一はじめに／二中卷第三十三縁の神話的理解の問題／三食人鬼と外来伝承／四『伊勢物語』第六段と関連説話／五 おわりに

第二章 固有伝承と仏教説話の出合―道場法師系説話―

第一節 捉雷縁と仏教の意味／一はじめに／二非仏教説話と仏教的意義／三氏族伝承の改変／四神の没落を説く話／五おわりに／付 少子部氏の伝承 * 第二節 氏族伝承の変容／一はじめに／二狐女房の正体を暴く者／三狐と犬の葛藤する狐女房譚／四上巻第二縁の表現／五氏族伝承の表現の性格 * 第三節 道場法師伝の形成／一はじめに／二各段の形成／三道場法師像の形成と名前／四道場法師譚の形成者 * 第四節 尾張国の力女伝承／一はじめに／二中卷第二十七縁と尾張国／三尾張力女伝を支えた人々／四中卷第四縁の周辺／五力女譚の蒐集と定着

第三章 外来伝承の土着

第一節 龜報恩譚の土着／一はじめに／二龜報恩の典拠／三龜報恩譚の土着 * 第二節 武蔵国における外来伝承の受容／一はじめに／二中卷第三縁と『雑宝蔵経』／三防人制度とのかかわり／

四下巻第七縁と孫敬徳伝／五中巻第九縁の形成／六おわりに

＊第三節 落盤事故からの救出／一はじめに／二外来伝承の受容

基盤／三採鉄と観音信仰／四鄴下人と下巻第十三縁の観音信仰／

五知識経の意味／六おわりに ＊第四節 大安寺関係説話／一は

じめに／二大安寺関係五説話の検討／三大安寺の修多羅衆／四中

巻第二十四縁の形成事情と意図／五大安寺関係説話と景戒 ＊第

五節 仏像靈異譚の伝来と変容／一經典等の仏像靈異伝承／二御

衣木の靈異／三火災から逃げ出す像／四苦しみの声をあげる像

第四章 仏教説話形成の場の広がり

第一節 蟹報思譚の形成／一はじめに／二類話の問題／三昔話お

よび二話の先後関係／四中巻第十二縁の性格／五中巻第八縁の性

格／六おわりに ＊第二節 説話と事実／一はじめに／二真道の

任官と解状発見／三施岐僧都の周辺／四火君の解状と防人／五古

麻呂の法会と説話化 ＊第三節 方広経の靈驗／一はじめに／二

『方広経』の実体／三下巻第四縁の分析／四景戒と下巻第四縁／

付 老僧観規は私度僧か ＊第四節 経が魚に化す話／一はじめ

に／二下巻第六縁形成の意図／三『三宝絵』の受容／四『今昔物

第五章 景戒の教養と思想と信仰

第一節 景戒と外教／一はじめに／二上巻序文と儒教／三上巻第

二十五縁と儒教的教養／四政治的事件の歴史的記述と景戒の教養
／五儒教的教養と『靈異記』 ＊第二節 景戒と表相／一はじめ

に／二表相の用語／三表相への関心とその契機 ＊第三節 景戒

の夢解と仏性の認識／一はじめに／二闡提の断滅／三夢解と自

己の仏性認定／四おわりに

あとがき

紙幅の制限から見にくい、目次の紹介となつてしまつたが、専門と

する方が一覽すれば、著者が論じようと思はれたところが明らかにな

る詳細な目次となつてゐる。

著者は、土橋寛氏の指摘される「個人の意識によつて捉えられた

現実的な驚きの文学」を説話の基本的な性格として考えられ、『靈

異記』は「まだ仏教が浸透しきつていないなかで、不信者を相手に

仏教信仰に導くことを狙つて説かれた」（第四章第二節）、「あくま

で仏教説話集であり、神話集でも伝説集でもない。氏族伝承も説話

として扱われ、改変を受けてゐるのであり、（アヤシ）の世界を

充実させるものも「基本的には仏教的意図を放棄したうえでのこと

ではなかつた」（第二章第一節）と言われるところに、『靈異記』に

対する著者の基本的な姿勢を見ることができると思ふのである。ま

た、景戒の直接的な教化の対象者は『靈異記』を手にすることがで

きる知識層であり、説話の配列を先例のある類纂法をとらずに、原

撰時点での時代配列の方法をとったのは、日本の「仏教靈異史」を意識したものとされる（第一章第二節）。そして表相の理念によって説かれた下巻第三十八縁は、その「仏教靈異史」としての完結性を「崩しかねないところがあったが、説話集としての性格を豊かにする契機をなしたものと評価することもできよう」（第五章第一節）と言われる。

第二章から第四章で取り上げられている説話の考察には、論の飛躍がなく、専門外のもので読んでもその説話の宿している問題点に分かりやすく述べられているのは、「各節が、そこで論じられる説話あるいはテーマのさながら詳細な研究史ともなっている」（「説話文学研究第三二号」掲載の藪敏晴氏書評）からなのであらうと思われる。なお、藪氏以外にも、出雲路修氏（「万葉」一六二号）、多田一臣氏（「国語と国文学」七五巻一号）の書評がある。

（和泉書院刊、平成八年三月三〇日発行／B5判／四六五頁／一三三九〇円）

（浅野敏彦）

久保田孝夫・関根賢司・吉海直人編

『松浦宮物語』

長く待望されていた『松浦宮物語』の注釈書が、ようやく使いやすい形で刊行された。

十二世紀末頃の成立とされる『松浦宮物語』は、広くその名が知られる物語であるにもかかわらず、これまでテキストが豊富に揃っていたとは言い難い。利用しやすい翻刻の数も少なく、注釈書としては、萩谷朴氏による角川文庫本が唯一のものであった。しかも角川文庫本は版が絶えて久しく、古本すら手に入りにくい状況が続いている。物語研究者にとって、信頼できる本文と新たな見地に立つ注釈とが今回提供されたことは、喜びに堪えないものがある。

本書は、底本に現存最古の伏見院宸翰本を用いる。これは、この物語の伝本を考察する上でも貴重な本であるとともに、最近では現物が容易に閲覧し難い状況であると仄聞する中で、資料的価値も大きなものであると言えよう。本書では、巻一から巻三までの本文を全部で五三の章段に分け、それぞれに見出しを付す。見出しは多く四字句の体裁をとり、この物語が拠って立つ世界を窺わせる。

頭注もまた、独自の視点によるものである。作中に引用された前時代の和歌、物語、漢詩文を指摘することは従来よく行われているが、それに加えて、「同時代の類歌、類似表現を掲げること」が最大の特徴である。それにより、古代の物語の在り様をふまえつつも、中世を迎えようという、時代の姿が立ち現れる注釈となっている。

これらの本文と注釈の作成は、「松浦宮物語輪読会」の約一年半にわたる活動の成果によるものである。二十余人で章段を分担し、討議を経て練り上げ、最終的に編者によって精選された結果として本書であり、視野の広さと全編の一貫性とを兼ね備えることを可能にしている。編者の分担は、「草稿の本文と注の整理」は久保田氏と関根氏によるもので、巻末の「解説」は久保田氏が、「研究文献目録」は吉海氏が担当されている。これらの「解説」と「研究文献目録」とを合わせ見れば、現時点の研究状況がほぼ把握できるところとなり、大変便利である。

後期物語の研究も続々と発表される昨今、『松浦宮物語』研究の一層の進展が期待されている。そのための環境がこうして整備され始めてきた。しかも、ハンディなテキストとしての本書の登場は、若い研究者が手元に備える上でも有り難く、更に研究の裾野を広げることであろう。その後、再び萩谷氏の校注で『松浦宮物語全注釈』が出された由である。さまざまな角度からの本格的研究が始ま

ろうとする中、いち早く本書が名乗りを挙げた功績は大きい。

(翰林書房刊、平成八年三月一日発行/A5判/一四三頁/一八〇〇円)

(桑原もと子)

加美宏著『太平記の受容と変容』

本学教授加美宏氏の、『太平記』享受史をめぐる第二論文集である。前著『太平記享受史論考』(一九八五年 おうふう)では『太平記』が成立した十四世紀後半以降の中世享受史に論述の力点が置かれていたが、本書では十八世紀頃までの近世期を主眼としている。本書は次のように構成されている。著者の『太平記』観を論じた

第一章『「太平記」論』、近代までの『太平記』の受容と評価の歴史を整理した第二章『「太平記」受容史素描』、『太平記』の享受方法である「読み」という口承活動の変遷を探る第三章『太平記読み小考』。これら総論的な諸章で提示した享受史上の課題を踏まえて、近世初頭に簇出した『太平記』の注釈書や評判書を個別に検討するのが、第四章『「太平記」の研究と受容の考察』と第五章『「太平記

評判』考説』である。そして付章『太平記』人物小論』の小嶋法師論・尼鳥高德論と、翻刻『楠氏二先生全書』によって、本書の『太平記』享受史論と研究史論が側面から補強されている。このうち、本書の主眼である近世享受史論の中核をなすと思われる第四章と第五章を基点にして、以下、所説の概観を試みることにする。

公家や大名を中心に、読み上げや書写の形で享受されてきた『太平記』は、十六世紀後半の戦国武家の間での伝本書写の流行と、古活字版の刊行によって大普及時代を迎える。読解・鑑賞のための本格的な注釈書も編まれた。『太平記賢愚抄』や『太平記鈔』である。特に『太平記鈔』は質量ともに『太平記賢愚抄』を凌ぎ、『太平記』の叙述内容に踏み込んだ注解と、典拠の追求や考証・批判に示される厳密な学問的態度によって、中・近世の『太平記』研究史のピークをなす（四章一節）。

また『太平記評判秘伝理尽鈔』（以下『理尽鈔』）、『太平記評判秘要理尽無極鈔』も刊行された。両書は『太平記評判』と総称され、『太平記』が描く事件や人物に論評を加えた「評」と、『太平記』には見えない挿話や裏話といった外伝を叙述した「伝」からなる（五章一節）。この『太平記評判』は『太平記』と並ぶほどの流布をみせ、様々な文化領域に浸透していった。特に『理尽鈔』は、講釈師によってまず武家層に、次いで町人も対象にして講義読釈され（四

章一節）、この『理尽鈔講釈』が、『太平記読み』という、『太平記』本文の通俗的講釈へと繋がる（三章三節）。またその叙述は、『太平記』とともに、幕府の正史『本朝通鑑』の拠り所にされる一方（五章三節）、近世に輩出する軍記評判や役者評判などの『評判記』の形式も用意した（五章四節）。あるいは『理尽鈔』の「伝」に描かれた独自の楠木正成像や、その家臣で、『太平記』には登場しない恩地左近太郎・泣き男杉本左兵衛らの活躍が、『太平記』を題材にした浄瑠璃や小説に影響を与え、「もう一つの『太平記』」世界の形成を促すことになった。（五章五節）。著者が書名に「変容」の語を冠するのは、こうした享受の動向をふまえてのことと考えられる。

巻末の翻刻『楠氏二先生全書』は、そうした世界が言説化された嚆矢としての資料価値を持つものである。

注釈書の集大成ともいべき『太平記大全』・『太平記綱目』もこの期に刊行されているが、著者は両書の独自性とともに、これらもまた、出典や批評方法など、多くを『太平記評判』に負っていることを明らかにしている（四章二節・三節）。両注釈書の原流に位置する『太平記鈔』が、日蓮宗僧侶の文学活動の所産という点で『理尽鈔』の成立事情に類似する（四章一節）という指摘を勘案すると、著者はそうした注釈書類と評判書類の影響関係の背後に、成立・管理環境の共通性をも見据えているかと思われる。

つまり、第四章・第五章の各論は、丹念な本文検証と外部資料を駆使した実証によって個別の課題を追究すると同時に、「太平記評判」の近世享受史上での位置付けを試みようとしたものであるともいえるだろう。荒唐無稽として退けられてきた『理尽鈔』の「名義并由来」の作者説にもそれなりの根拠と合理性があることを指摘し、『太平記』享受史上における『理尽鈔』の位置付けを見直す必要があることを主張した第五章第一節・二節には、著者のそうした問題意識が端的に表明されている。

ところで著者は、以上のような享受史研究の目的を次のように述べている。

『太平記』について、その広大な流布と影響の流れを、多面的かつ実証的に検証し、その流域の実態や変遷を解明して、そこから源流に遡行し、そこからの眺望を新たな視点として中世軍記物語としての『太平記』の文学的特質や文学史的位置をみきわめみたい（「まえがき」）

『太平記』享受の諸相を検証することはまた、『太平記』自身が胚胎している多様な作品性を採り出す営みでもあるわけである。つまり、史書・政道書・兵法書として受容される一方、講釈という舌耕芸を通じて文学としても人口に膾炙していくという、著者の説く『太平記』享受史のありようが、

編年的な年代記述と、批評的記述とを骨格としながら、それを緊密につなぎ合 わせ、ストーリーを構成するものとして、物語的なものを全編にはりめぐらせている

という観点を基調に展開される、『太平記』論（一章二節）を説得力あるものにしているのである。あるいは、『太平記』それ自身が既に「南北朝内乱についての、一種の評論書・評判書」であり、『軍記評論』であるという規定（一章二節）も、享受史研究の成果を踏まえてこそその見解であろう。

このように、本書の『太平記』享受史をめぐる諸論考は決して個別論として狭く完結しているのではなく、著者の『太平記』観と響き合う論述となっている。その意味で、多様な諸本群を擁する故に、ともすれば個別的課題の追究に追われがちな『平家物語』研究にとつても、示唆に富む著作であるといえるだろう。

（翰林書房刊、平成九年二月二四日発行／A5判／四八六頁／一五〇〇円）

（谷村 茂）

真銅正宏著

『永井荷風・音楽の流れる空間』

芸術家がその作品を創作する際に、他分野の芸術の影響を受ける場合が多々ある。文学においても作者の享受した、或いは研究した絵画や音楽などの他分野の影響が、題材や技法に表れている例が見られる。この書はそのように他芸術、特に音楽にかかわった作家の一人である永井荷風について述べられたものである。

荷風が誕生した明治という時代は、政治面だけではなく文化面においても大きな変革が起こった時期であることは周知の事実である。政府自らの欧化政策による西洋文明の急激な流入は、人々の生活のみならずその精神にも一種の混乱を生じさせた。それは長い鎖国時代に独自の形として培われた旧来の東洋文化と対立することにより、生じる場合が多かった。

また、文明の開発は、都市と地方に大きな差異を作り上げた。これも、人々に混乱を生じさせた要因の一つといえる。そのような時代を目的の当たりにした荷風も、他の人々同様文明のはざまに立って、内面的な混乱を体験した一人といえよう。そこで本書は音楽との関

わりから、荷風の「西洋と明治日本」、および「江戸」という「場所」の中から自己の位置を模索する様を見ていこうとしている。

中でも「邦楽」と「洋楽」の対立が、大きなテーマの一つとしてあげられている。我が国の旧来からある音楽といえは、雅楽などがその例としてあげられる。この雅楽は古来から貴人の音楽として、伝えられてきたものである。一方、庶民が親しんだのは江戸期に発達した長唄や常磐津・小唄といったものである。これらを一纏めにして「邦楽」という。この「邦楽」という名は、西洋音楽つまり「洋楽」と区別するために作られ、その概念も「洋楽」と対立するものとしてとらえられたといつてよいだろう。

このように雑多なジャンルの融合体ともいえる「邦楽」とらえていこうとするのは、かなり困難な問題が伴う。まず、その範疇に存する各ジャンルは完全に独立して存在するのではなく、どこかでつながりを持ちつつ並立するといえる。このつながりが非常にあいまいであるため、より「邦楽」がとらえがたいものとなっている。

また、元来その伝承の際には、現在使用される楽譜のようなものが使われなかった。つまりすべて耳で聞き取ったものを、演奏し伝えていったのである。その上、師匠から弟子への曲の伝授においては、明確で詳細な技法指導などがなされなかった。よって伝承されていくうちに変化が生じ、同じ曲でも部分的に違うフレーズを持つ

たものや、違う歌詞を持ったものが存在するようになってくる。また奏法も流派によって、違うものが生まれてきた。このような差異は、現在でも残っている。

以上のことから、「邦楽」は不統一性、つまりあいまいさを多分に含むものであるため、その研究に困難が伴うといつてよいのである。現在、音楽専門家によるこの分野の研究もなされているが、「洋楽」に比べるとまだまだ未開発な面が多い。実際、邦楽演奏に携わっている者でさえ、その特性や本質の理解が不十分である場合が多々ある。

このような状況で、邦楽を文学という分野とからめて研究していくというのは、非常に大変な事であるといえる。つまり文学の中の音楽の果たす役割を考察していくには、単に理論的な知識だけでなく、実際に多くの曲を耳にし、その演奏技法を目にする必要が出てくるのである。

これまでも、文学と邦楽の関わりについて論じたものがあるようだが、あくまで文学を主とし、邦楽については、その表層しかとらえられていないものが多いように感じる。それに対して、この書では文学よりむしろ音楽の方に焦点をあてた論が展開されている。実際に楽器を手にし演奏に取り組んだ荷風と音楽のかかわりを検討していくには、かなりの専門知識が必要であることが明らかである

が、それを丁寧分析していることが他の書に比して優れているところであろう。

荷風は単に音楽を聞いていただけでなく、実際に楽器を持ち、演奏していた事は先にも述べた。そうすると、荷風を研究していく上で、音楽は避けては通れない問題だといえる。音楽、特に「邦楽」は非常にとらえがたい問題を孕んでいるため、その研究がとかく避けられやすい。それを真つ正面からとらえている点で、この書は内容的にも充実し、かなり読み応えのあるものだといえる。

（世界思想社刊、平成九年三月三十一日発行／B6判／二三八頁
／二五〇〇円）

（田中利佳）

明川忠夫・星田公一・柳田洋一郎共著

『秋山郷の民俗―爺さ・婆さのムカシ―』

信越の国境に跨がり、やがて信濃川に注ぐ中津川流域に点在する集落が秋山郷である。江戸末期、文政年間に『北越雪譜』で知られる信濃の文人鈴木牧之が著した『秋山記行』によって、この幽遠の

地は広く人々の知るところとなった。かつて集落は十五を数えたが、飢饉で三つが減び、一つは廃村となって、現在は十一の集落が深い溪谷を覗き込むようにしてある。一帯は有数の豪雪地帯である。冬は厳しく外界との交渉を遮断する。のみならず通常においてさえ里との心理的物理的距離が甚だ大きい。そんな条件が「籠もりの里」秋山を形成してきた。そこは豊かな伝承の庫であった。だが、過疎化とそれに伴う観光化の波はこの秋山をも例外としない。秋山の生活は大きく変貌し、連綿と受け継がれてきた伝承も多く消滅しつつある。本書は、そうした秋山の生活と伝承を老人たちの記憶の中から掘りあげ、記録として留め、民俗社会・伝承世界の生き生きとした姿をテキスト化しようとする試みである。

本書の出発点となった秋山郷の調査は、昭和五十四年、廣川勝美先生が主宰する「同志社大学伝承と文芸・つちくれの会」の共同研究の一環として始まり、足掛け三年にわたった。その後の中断を挟んで、明川・星田・柳田の三氏が、再び平成六年から調査を開始し、それらの成果がこの出版として結実したわけである。

本書は、「爺さ・婆さのムカシ」という副題が示すように、秋山郷での聞き書きがそのベースであり、実に多種多様な「ムカシ」話を収録している。そしてそれらが項目ごとに整理され、小テーマのもとに配列されている。その構成は以下の通りである。

第一章 秋山はどこか―「信濃と越後の国境に秋山といふ処あり

―

第二章 秋山の日常生活―生活の基本は飢饉の記憶―

第三章 冬の生活―冬越すのは命がけ

第四章 江戸逃げ―東京行き―江戸逃げはおもしろい―

第五章 食べ物と結婚するようなもの

第六章 秋山の信仰

第七章 落人の里

第八章 飢饉の記憶

第九章 動物と妖怪

このうち第一―第五章は星田氏が、第七―第九章は柳田氏が担当し、明川氏は第六章と論考「如来さま・黒駒太子」を担当している。勿論本書は、単なる聞き書き集に止まっているのではない。適宜、項目ごとに、補足を施し考察を加えるという立体的な組み立てになっている点がユニークである。

秋山は落人の村、焼畑の村として知られている。そのことは秋山が里から遠く隔たった「山方」の村であることを意味している。落人はより遠く里から遠ざからなければ生きながらえることはできない。焼畑は稲作を許容しない奥深い山間の傾斜地に営まれる生業に他ならない。したがって、秋山の生活と伝承は、平地の稲作民俗社

会とは、大いに性格を異にするものである。本書の聞き書きは、そうした貴重な「山方」の記録なのである。

たとえば、秋山では山は平地から仰ぎ見る存在ではない。自分たちの生活空間に直接に繋がった、というより山そのものが生活空間なのである。山は怪異に満ちている。だから、一歩家を出れば、神かくしに出会うかもしれない。山は靈威の籠もる場所である。だから、すぐ近くに神の宿る木が茂っている。子供が生まれると健康な成長を祈って二本の杉を植える。病気になったらまた植える。死者は傾斜地の畑に埋める。すなわち生も死も怪異も山とともにある。これが秋山の生活である。

興味ある伝承は尽きない。秋山を訪れる座頭・瞽女・六部・葉売り・マタギなどの芸能者・宗教者・行人・狩猟者にまつわるもの。六部殺しの伝説があり、マタギが所持した「山立根本巻」が残る。宗教者といえば秋山に土着し、黒駒太子の信仰を根付かせた家系が今も伝わる。明川氏の論考はその歴史的経緯を民俗宗教史的にあとづけるもの。その他飢饉、狩猟、妖怪、落人など、与えられた紙幅でそれらを網羅して紹介することは到底できないが、本書の巻末を飾るのが、地元津南町で長年秋山の調査に取り組み、明川氏らの調査にも協力された滝沢秀一氏の特別寄稿「秋山の古風」である。こうした地元のお力添えもあって、本書は早くも近々版を重ねると聞

く。その意味で本書は、研究者と伝承を支えてこられた方々との共同の仕事といえるだろう。

(初芝文庫刊、平成九年九月二十日発行／B6判／三六三頁／二五〇〇円)

(谷口廣之)